2022年3月 地方公演チケットお問い合せ先

3月5日(土)	大野城まどかぴあ(福岡県大野城市)	092-586-4000
6日(日)	戸畑市民会館(福岡県北九州市)	093-562-2655
9日(水)	あましんアルカイックホール・オクト(兵庫県尼崎市)	06-6487-0810
11日(金)	高崎芸術劇場スタジオシアター(群馬県高崎市)	027-321-3900
13日(日)	所沢市民文化センターミューズ(埼玉県所沢市)	04-2998-7777
3月18日(金) 19日(土)	京都府立文化芸術会館(京都府京都市) 【19日は上演順を入替】	075-222-1046
20日(日)	アクリエひめじ中ホール(兵庫県姫路市) 【曽根崎心中のみ上演】	079-284-5806
21日(月・祝)	三重県文化会館(三重県津市)	059-233-1122

※新型コロナウィルス感染症の拡大状況によって、公演の開催を中止する場合がございます。

二〇二二年三月 地方公演 配役表

昼の部

解　説　（あらすじを中心に）　豊竹藤太夫

一谷嫩軍記

熊谷桜の段　（人形役割）

豊竹靖太夫	妻相模	吉田簑二郎
野澤勝平	堤軍次	吉田玉翔
	藤の局	吉田一輔

熊谷陣屋の段

前 竹本千歳太夫	梶原平次景高	吉田文哉
豊澤富助	石屋弥陀六実は弥平兵衛宗清	吉田玉也
後 豊竹藤太夫	熊谷次郎直実	吉田玉助
鶴澤藤蔵	源義経	吉田玉佳
	百姓	大ぜい
	奴	大ぜい
	軍兵	大ぜい

囃子　望月太明藏社中

観劇当日に発熱や風邪のような症状のある方、体調のすぐれないお客様はご無理なさらず、来場をお控えください。観劇時は咳エチケットの励行ならびに、マスク着用・手洗い（手指消毒）の徹底などの感染症対策にご協力のほどお願い申し上げます。

一谷嫩軍記

一ノ谷での源平の合戦。「一枝を伐らば一指を剪るべし」と記された制札を、源義経から渡され、若木の桜を守れと命じられた熊谷直実。一騎討ちとなった、我が子と同年輩の平敦盛―実は、後白河院と、熊谷にとって命の恩人である藤の局との間の子―を討ち取りました。

初陣の息子が心配で、武蔵国から旅をして来た妻相模。追手を逃れ、偶然にも熊谷の陣屋へ駆け込み、我が子の仇と迫る藤の局。そんな二人に熊谷が語ったのは、子を失った両親の嘆きを思い、組み敷いた敦盛を助けようとしながらも討たざるを得なかった合戦の様子と、敦盛が最期まで母の身を案じていたことでした。

いよいよ首実検。熊谷は、制札に従い敦盛を討ったとして、我が子の首を義経の前に。制札の真意を、「一子を切らば一子を切るべし」、院の子である敦盛を切るなら、自身の子を切れと判断したことは、正しかったのか？あるいは間違いか？熊谷の問に、義経は首を敦盛と認めました。

敦盛は熊谷に匿われ無事。思いもよらない息子の死に慟哭する相模。大切な子を失い、もはや俗世に何の望みもない熊谷は出家を志し、その場で髻を切って法然のもとへと向かいます。

宝暦元年（1751）、豊竹座で初演された五段の時代物で、今回上演される三段目までを執筆して並木宗輔が亡くなり、残りの段を他の作者たちが補いました。

熊谷が一ノ谷（神戸市須磨区）の合戦で敦盛を討った話は『平家物語』の中でも有名で、子に死なれる父親の悲しみを思いやり、我が子のような若武者を討たねばならず苦しむ姿が描かれています。そこに、実はそれは我が子であったというひねりを加えた本作では、熊谷の内面により深い苦悩と悲しみが秘められ、「16年もひと昔。夢であったなあ」と、息子への思いが、心の奥から絞り出されるように語られるのが、印象的。悲劇を豪快に描く時代物の代表的演目です。

夜の部

解　説　（あらすじを中心に）　竹本碩太夫

曽根崎心中

近松門左衛門＝作　野澤松之輔＝脚色・作曲

生玉社前の段　（人形役割）

竹本小住太夫	手代徳兵衛	吉田玉男
鶴澤清丈	丁稚長蔵	吉田玉彦

天満屋の段

竹本織太夫	天満屋お初	吉田和生
鶴澤燕三	油屋九平次	吉田玉志
	田舎客	吉田和馬

澤村龍之介＝振付

天神森の段

お初 豊竹睦太夫	遊女	桐竹紋臣
	遊女	桐竹紋秀
	天満屋亭主	吉田玉勢
徳兵衛 豊竹咲寿太夫	女中お玉	吉田文昇
竹本碩太夫	町衆	大ぜい
野澤錦糸	見物人	大ぜい
野澤錦吾		
鶴澤燕二郎		

囃子　望月太明藏社中

◎字幕表記がございます。席によっては字幕が見えにくい場合がございますのであらかじめご了承ください。
◎出演者の急病やその他やむを得ない事情により、代役もしくは演目を変更して上演する場合がございます。あらかじめご了承ください。
◎開演中の写真撮影・録画録音ならびに携帯電話・スマートフォン等の使用は固くお断りいたします。

曽根崎心中

離れては生きていられない二人―醤油屋の手代徳兵衛と天満屋の遊女お初。

徳兵衛は、店の主人からもちかけられた縁談話を断固拒否。ついに破談となり、欲深い継母が知らぬ間に受け取っていた持参金を主人に返すことに。期限は明日。金はすでに継母から取り戻して来てありましたが、激怒した主人に大坂追放を言い渡された身。お初と会えなくなる…。嘆く徳兵衛を力づけ、金を一刻も早く主人に返して怒りを和らげるよう、勧めるお初。

ところが、その大切な金を、徳兵衛は油屋九平次に頼み込まれて貸してやっており、この日になって騙し取られたことが判明。それどころか、証文を偽造して九平次から金をゆすり取ろうとした犯罪者にしたてあげられてしまいました。

身の潔白を証明するには死ぬよりほかない…。天満屋へ姿を見せた徳兵衛から覚悟を聞かされたお初は、一緒に死ぬことを決意。深夜、徳兵衛と手を取りあって、曽根崎の天神の森へ。

元禄16年（1703）、竹本座で初演された近松門左衛門の世話物第1作。実際にあった曽根崎（大阪市北区）での心中事件のわずか一月後に上演、大好評を博しました。同時代の題材を扱うことのなかった浄瑠璃にとって画期的な作品です。その後は上演が絶え、昭和30年（1955）に、野澤松之輔の脚色、作曲により、四ツ橋文楽座で復活されました。

店の縁の下に身を潜める徳兵衛が、その上に腰かけたお初の足を手に取り、言葉を交わしあうこともなく、人知れず心中の意を確かめあう「天満屋」。「この世の名残、夜も名残…」、有名な道行で始まり、原作通りではないものの、心中する二人の思いが迫り来る、悲しくも美しい「天神森」。原作で近松がその死を「恋の手本」と讃えた二人の強い結びつきが胸を打つ、海外公演でも絶賛される人気演目です。